

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 土佐 桂子 印

学位申請者 Rahmat Sopian（ラフマツト・ソピアン）

論 文 名 “The Networking of Old Sundanese Manuscripts Production in the 15th and the Early 16th Centuries: Analysis of Old Sundanese Manuscripts Held in the Kabuyutan Ciburuy’s Collection

【 審査結果 】

ラフマツト・ソピアン氏から提出された博士学位請求論文“The Networking of Old Sundanese Manuscripts Production in the 15th and the Early 16th Centuries: Analysis of Old Sundanese Manuscripts Held in the Kabuyutan Ciburuy’s Collection”について、論文審査と口述による最終試験の結果、審査委員会は全員一致で同氏に博士(学術)の学位を授与することが適当であるとの結論に達した。

最終試験は2022年11月2日(水)17時00分から約2時間をかけて、Zoomによるオンラインで実施された。なお、審査は公開とし、すべて英語で行われた。まず始めにラフマツト・ソピアン氏により提出論文の概要説明があり、その後、各審査委員から同氏に対して、質問や助言・講評などのコメントがなされた。最後に、フロアからの質疑応答を受け付け、インドネシア在住の参加者からコメントがなされた。公開審査のあと審査委員会によって審査結果の判断がおこなわれた。

なお、審査委員会は、土佐桂子(東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授、主査)、降幡正志(同教授)、青山亨(同教授、主任指導教員)、千葉敏之(同教授)、菅原由美(大阪大学大学院人文学研究科教授)の5名から構成された。このうち、土佐、降幡、青山の3名は指導教員であり、千葉氏はヨーロッパ中世写本研究、菅原氏はジャワ語写本研究の専門家として審査委員会への参加を依頼したものである。

【 論文の概要 】

本論文の構成は以下のとおりである。

Introduction

Chapter 1: Research on the Old Sundanese manuscripts of Kabuyutan Ciburuy

Chapter 2: Old Sundanese manuscripts in Kabuyutan Ciburuy

Chapter 3: The network of Old Sundanese manuscripts production in the 15th and early

Conclusion

さらに、巻末には46ページにおよぶ Appendix を付し、カブユタン・チブルイ所蔵貝葉の全727枚の表裏1454面をリスト化し、貝葉を収納しているクロパック(貝葉写本を保存する小さな木箱)およびクロパックを収納している保管箱の番号、2種の公開済みデジタル画像コレクションの対応する貝葉画像番号、貝葉の種類、文字タイプ、筆跡スタイル番号などのデータをまとめている。

第1章では、カブユタン・チブルイ所蔵の古スندا語写本研究のこれまでの歴史と現状を概観する。西ジャワ州ガルット市のチクライ山麓に位置するカブユタン・チブルイ(チブルイは地名、カブユタンは「霊地」の意)は、古スندا語写本研究において重要な位置を占めている。学界には19世紀後半にオランダ人 Brümund (1864)によって初めて報告され、現在では、古スندا語写本を最も豊富に所蔵する伝統的な写本保管所 (scriptorium) と見なされている。古ジャワ語写本の専門家である Willem van der Molen は、カブユタン・チブルイにおける古スندا語写本について、その起源は明らかでないものの、古ジャワ語写本の伝統的保管所として知られる中部ジャワのムルバブの写本群と同じくらい古いとする(1983, 113)。

カブユタン・チブルイ写本の起源を明らかにするために多くの試みが行われてきた。その一つは、インドネシア国立図書館 (PNRI) にある古スندا語写本コレクションとの照応である。Pleyte (1914b, 365-441) は、*Poernawidjaja* の写本 (PNRI 所蔵写本416) を研究するなかでチクライ山地方のスリマンガンティという地名に着目している。写本作成の場所とみなされるスリマンガンティという地名は、*Carita Ratu Pakuan* (パクアン女王の物語、PNRI 411及び410) の写本のコロフォン(奥書)にも記載されている。Pleyte は1904年にチブルイ村の村長からの聞き取りとガルットの副知事 G. K. van Huls van Taxis との往復書簡によってスリマンガンティの調査を試みた。写本作成の場所を指すスリマンガンティという地名は、*Darmajati* の写本 (PNRI 423) にも見られる (Darsa, Ekadjati, Ruhimat 2004, 18-19)。スリマンガンティの他に、チクライ山地方での写本作成地に言及している PNRI 所蔵写本として、*Pitutur ning Jalma* (PNRI 610) と *Bima Swarga* (PNRI 623) がある (Holil and Gunawan 2010, 133-136; Wartini et al. 2010, 276)。また、*Sanghyang Swawarcinta* 写本にはチクライ山頂への言及がある (Wartini et al. 2011, 100)。しかしながら、カブユタン・チブルイに現存する古写本に関する調査結果からは、カブユタン・チブルイを写本作成の場所と明示的に述べたものは1つもなかった。

カブユタン・チブルイ写本の起源について、本研究では、カブユタン・チブルイに現存する写本とカブユタン・チブルイ以外の写本との関連性を調査した。調査では、カブユタン・チブルイ(研究済みのものと未研究のものを含む)の写本全体を分析し、分析から得られた写本のテキスト、題目、作成場所などの情報を公刊済みの他の古写本の情報と照合した。

調査では、これまで1987年から2020年にかけて実施されたカブユタン・チブルイ所蔵写本の調査結果を再検討し、明らかにされた事実および欠落点を明確にした。その要点は以下のとおりである。
(1)カブユタン・チブルイ所蔵写本群は3つの保管箱に保管されているが、これまでの研究は1番目の

箱にある写本に偏っている。(2)一つのクロパック(貝葉写本を保管する小さな木箱)に納められたほとんどの貝葉写本には複数の異なったテキストが混在している。(3)以下の複数の写本について題目が特定された：*Kisah Putra Rama dan Rahwana* (ラーマとラーワナの息子たちの物語)、*Tattvajñāna*、*Sewaka Darma*、*Kawih Katanian*、*Bima Swarga*、*Sang Hyang Hayu*、および *Kawih Manondari*。

第2章では、本論文の中心となるカブユタン・チブルイ所蔵写本の分析をおこなう。最初に、カブユタン・チブルイの概観を示したあと、参与観察をおこなったセバ儀礼について説明する。セバ儀礼は、毎年、カブユタン・チブルイにおいて近隣の人々が参集して執り行う儀礼で、祖先から伝承された貝葉写本への敬意を示す行為によって、祖先への恭順と敬愛を表明する。この儀礼の伝統的な実施が結果的にカブユタン・チブルイでの古スンダ語写本の保存を可能としたこと、その一方で、古い文字の読解力をもたず内容を知らない地域住民による取扱いの結果、皮肉なことに、写本の保存において、貝葉の順序、位置や保管箱の場所が入れ替わってしまうことにもなった。

続いて、カブユタン・チブルイ所蔵写本の貝葉の識別と分類のプロセスを詳述する。識別においては、まず、カブユタン・チブルイに現存する写本貝葉の総数を確認した。写本貝葉を識別する番号付けは、現地における調査結果と、大英図書館の *Endangered Archives Programme* およびパジャジャラン大学の *Ancient Manuscript Digitation and Indexation* に記録された画像データとを照応することで検証した。その結果、これまでの記録データにある誤りを正し、現在、カブユタン・チブルイには総数727枚の写本貝葉があることを確定した。現地において、これらの貝葉は26個のクロパックに分けて納められ、これらのクロパックは大小3つの保管箱に保管されている。727枚の貝葉は、文字が書かれた703枚、文字が書かれていない13枚、さらに断片化した小片11枚に分けられる。

カブユタン・チブルイの写本貝葉の正確な数を把握した後、写本作成に使われた文字の種類に基づいて、文字が書かれた貝葉703枚を、古スンダ文字、西部古ジャワ方形文字、現代ジャワ文字もしくは現代バリ文字(両者は基本的に同一)に分類した。この結果、古スンダ文字の貝葉は480枚、西部古ジャワ方形文字の貝葉は222枚、現代ジャワ文字または現代バリ文字の貝葉は1枚であることが判明した。

次の段階として、すべての写本貝葉を、筆跡に基づいて分類した。この作業が必要となったのは、カブユタン・チブルイのほとんどの写本貝葉は異なったテキストが混在する状態になっているうえに、損傷が多いため、テキストの内容をただちに分析することが困難だからである。異なった筆跡は異なった写本筆記者による写本の作成を意味しており、筆跡による分類をまず実施することで、写本のテキストを判別し、題目や主題を探しだすことが容易になる。筆跡の分析から、カブユタン・チブルイ所蔵写本のうち、古スンダ文字写本には20種類、西部古ジャワ方形文字写本には5種類の異なる筆跡を確認することができた。筆跡分類を踏まえた結果、古スンダ文字写本からは7点のテキスト題目、西部古ジャワ方形文字写本からは2点のテキスト題目を特定することができた。

筆跡分類によっても題目が明らかにならなかった写本貝葉については、ローマ字転写をおこない、

テキストの題目あるいは主題の特定を以下の複数の方法によって試みた。(1) 公刊された他の古スンダ語写本との比較、(2) 題目を示す語の検索(通常、写本の冒頭または末尾のコロフォンに出現)、(3) 公刊された写本との類似性がなく、冒頭または末尾の貝葉が欠落または破損して題目が特定できない一部の写本については、テキストの内容から主題を確定、の3つの方法である。第1と第2の方法によって、それぞれ5種類の筆跡の写本についてテキストの題目を、さらに、第3の方法によって、6種類の筆跡の写本についてテキストの主題を特定することに成功した。最後に、カブユタン・チブルイ所蔵写本から得ることができた写本作成の時期、場所、筆記者に関する情報の分析をおこなった。

第3章では、第2章の分析結果に基づいて、カブユタン・チブルイ所蔵写本と他の写本との関係の解明を試みる。具体的には、写本のコロフォンの記述およびテキストに見られる類似性の分析を試みた。カブユタン・チブルイ所蔵写本のうちコロフォンがある写本から得られた情報を検討した結果、カブユタン・チブルイに現存するいくつかの写本が、西ジャワ州ガルツ市のチクライ山、西ジャワ州バンドン県のシサンティ、西ジャワ州クニンガン県のヌサヘランに由来することが判明した。カブユタン・チブルイ所蔵写本と他の写本とのテキストの類似性を検討した結果、カブユタン・チブルイ所蔵写本のいくつかは、中ジャワ州ブルブス県グヌン・クンバンのクタ・ワワタン、西ジャワ州ボゴール県のカブユタン・コレアン、中ジャワ州ボヨラリ県のムルバブ山、西ジャワ州バンドウン県、バンテン州のパナイタン島、およびバリ州と直接的または間接的な関係を持っていることが判明した。

結論として、カブユタン・チブルイが、古スンダ語写本が作成され保管されてきた写本保管所(*scriptorium*)であることが検証された。カブユタン・チブルイが写本の作成場所であったという想定は、同地において、同じ題目の複数の写本、未完成の状態の写本、および伝統的な筆記用具の遺物が現存することによっても裏付けられる。また同地で作成された写本だけでなく他の場所で作成されて持ち込まれた写本の保管場所であることは、現に古スンダ語写本が多数保管されていることに加えて、カブユタン・チブルイ以外の場所での作成に言及する写本が発見されたことによって裏付けられる。

その一方で、カブユタン・チブルイで作成された写本が他地域に移動した可能性については、A.B. Cohen Stuart や N.J. Krom などのオランダ人学者が指摘した情報によって示唆される。彼らは、カブユタン・チブルイ以外の場所で伝承されてきた複数のスンダ語写本について、コロフォンの中に写本の作成場所としてカブユタン・チブルイ地方(スリマンガンティ、チクライ山、チクライ山頂など)が記されていることを指摘している。実際には、これらの写本は、西ジャワ州のバンドン(*Bima Swarga*, no. 623)、西ジャワ州のワナルジャ(ガルツ)(*Pitutur ning Jalma*, PNRI 610)、および西ジャワ州のガルフ(*Carita Ratu Pakuan*, PNRI 410および411)で発見されており、これらの写本がカブユタン・チブルイ地方で作成されたのちに移動した可能性を示唆している。以上から、15世紀から16世紀初頭にかけて、いわゆる「スンダ王国」の全盛期と対応する時期において、西部ジャワを中心に中部ジャワおよびバリにまで広がる古スンダ語写本の作成と移動のネットワークが存在したことが想定されることを指摘した。

【審査の概要と評価】

本論文は以下の点で高い評価を得た：

- (1) 古スンダ語文献の研究がまだ発展途上の段階にあるなか、その基本資料である古スンダ語貝葉写本の重要なグループであるカブユタン・チブルイに伝承される貝葉文献群の全貌を明らかにしたことは、今後の古スンダ語文献研究の基礎になるものである。
- (2) とくに、実地調査によるデータと先行する二つの画像データベースのデータとを丹念に比較検証し、カブユタン・チブルイ所蔵の貝葉写本全 727 枚の表裏 1454 面を同定したことは、今後のカブユタン・チブルイ所蔵写本研究の基礎となる成果である。
- (3) 分析においても、文字の種類、筆跡の種類で対象を整理したうえで、コロフォンとテキストの内容から貝葉写本の主題を絞り込んでおり、組織的に分析を進めている点、および、そのために画像データを駆使している点で、今後の写本研究の先例になる水準を示している。
- (4) コロフォンの内容およびテキストの共通性から、カブユタン・チブルイとそれ以外の地域とを結ぶ貝葉写本の作成および移動のネットワークの存在を浮かび上がらせており、今後の新しい研究の可能性を提示している。また本研究をもとに、東南アジア大陸部の写本やヨーロッパ中世写本との比較研究にも貢献できる可能性がある。
- (5) スクリプトリウムとしてのカブユタン・チブルイにおける貝葉写本をめぐる儀礼についても丁寧に記述しており、貝葉写本の維持と貝葉写本をめぐる地域的な伝統信仰との関連を示す文化人類学的研究としても興味深い。

このように、本研究の実証的な堅実さと、今後の研究につながる発展の可能性の大きさについて高い評価が与えられた。一方で、本研究の当初の射程を超えていることではあるが、以下のような点が、疑問点あるいは改善すべき点として指摘された。

- (1) 写本を作成した当事者である書記 (scribe) は、どのような性格をもっていたのか、宗教者であったのか、学者であったのか、また、書記たちはどのような意図をもって、写本の作成や移動に携わったのか、今後の研究で明らかにされることが期待される。
- (2) 写本の多くがイスラーム到来前のヒンドゥー的テーマをもつテキストであるが（たとえば、ラーマーヤナやマハーバーラタの登場人物に由来するテキスト）、なぜこれらのテキストが写本として保存の対象に選ばれたのか、社会史的な視点からの研究が進むことが期待される。
- (3) 同様に、現在ではムスリムであるカブユタン・チブルイ近隣の住民が現在にいたるまで非イスラーム的な内容の貝葉写本を聖なるものとして伝承してきたのは何故なのか、文化人類学的な視点からの研究が進むことが期待される。
- (4) 記述のなかで、音声学、音韻論、文字表記のレベル上の混乱があり、整理したうえ

で、表示するための記号の使用に統一性をもたせることが必要である。

最終審査では上述したような評価すべきポイントおよび疑問点や問題点が指摘され、いずれもラフマツ氏からは、分からない点については今後の研究に委ねることを含めて、誠実な回答が得られた。また、いずれの指摘も本研究が古スンダ語文献研究の基盤を築いたことにより新たな研究の可能性を飛躍的に広げたという認識のうえでなされたものであり、本論文の価値を損ねるものでは全くなることが確認された。博士論文の審査および最終試験の結果から、審査委員会は全員一致で、提出された論文は学術的に重要な貢献となるものであり、学位申請者ラフマツ・ソピアン氏に博士(学術)の学位を授与することが適切であるとの結論に達した。